

環境教育・環境学習

— 関係性を知って変心しよう

岡田真美子

● 心の中に変化を起す — 環境学習の目標

「日大学の新学舎のまわりの町筋道路の両肩は、すべてこれゴミの吹き溜まりなのである。(中略)それらがいつ来ても減らないところを見ると、どうやらこの町の住民はゴミとの共存をきめこんでいるらしい。(中略)清掃ゲリラの悲しい性で、そのうちどうとう我慢しきれず、火挟みやポリ袋を持ち出して拾い集めることとなった(中略)汚れがひどく長かっただけに、清掃後のすがすがしさはひとつの異変のように強烈であった。しかし次の週には元の木阿弥(中略)と相成ったが、今度は事務職員を先頭に運動部の学生たちも加わって清掃奉仕が始まった。また汚され、また掃除する。一ヶ月ほどの間に数回繰り返されただろうか。ここで町に異変が起こった。町からゴミの散乱がなくなったのである(中略)おそらく町の住民もゴミを拾い出したのであろう(中略)町の人の心の中に、ひとつの変化が起こったのである」

(長尾憲彰「カンカン坊主の清掃ゲリラ作戦」樹心社 初出「山紫水明」二九七九) 先生が町内のゴミを拾う。それを見た職員が立ち上がり、学生たちが合流し、いちごっこを繰り返した後、ついに町からゴミが消えた。ゴミの中で平然と暮らしていた住民たちが町をきれいにし始めたから

だ。頭の中でわかっただけではなく、胸に落ちて心変わりすると、行いも変わる。このように、人の心の中に変化が起こること—これがすなわち環境教育・学習の本当の意味であると思う。

筆者長尾は嵯峨野の空き缶公害に竹箒で立ち向かいカンカン坊主と呼ばれた人である。このような地元に着着した環境活動の積み重ねがあつて環境基本法や環境基本計画が成立し、今日の環境教育・環境学習があることをまず述べておきたい。

● 環境教育・学習の「四葉のクローバー」

一九九九年の暮れ、中央環境審議会が「これからの環境教育・環境学習—持続可能な社会をめざして—」という答申を出した。これが後の環境教育・環境学習の推進方策の基本的なあり方を決めるものとなった。その中で特に大切だと思われるのが次の四点である。

- 1 総合性
- 2 目的の明確化
- 3 体験重視
- 4 地域重視

教育・学習というときすぐに学校などの教育機関を思い浮かべがちである。環境教育・学習の現場としては、その他、地域・家庭・職場、野外活動の場など多様な場が考えられる。これらの連携を図りながら、総合的に推進してゆこうというのが「総合性」である。環境教育・学習を行うときにはとくに目指しているビジョンを明確にする必要がある

る。これが第2である。

またデスクワークのみの教育・学習では頭の中の理解に終わってしまう。心の中に変化を起すためには、「自然体験」「生活体験」の積み重ねが重要である。環境教育・学習に「体験型」ということは冠されるのはこのためである。

以上の三つにも増して重要なのは第4の「地域重視」である。環境はところによって異なる。各々のローカリティが重視されなければならぬ。そのため環境教育、環境学習は、地域に根ざし、地域から広がるものであることが求められるのである

● 地域と教育現場との連携がポイント

私事で恐縮だが、うちには十六歳の息子がいる。この子が小学生だったときから不思議だったことに、「ゆとりの教育」を願っていた。以後、子供たちも先生たちもなぜかそれ以前よりずっと忙しくなっている。環境学習をいっしょにやりましよう」と地域から声掛けしても、学校現場は自らの予定消化で精一杯ということが少なくない。学校での環境教育、環境学習の成功の鍵は、どこまで地域と協働できるかにかかっているといっても過言ではないだろう。

● 地域のタカラを結ぶ

地域重視のもうひとつの内容として、地

域の伝統文化や空間の歴史という観点を取り入れることが考えられる。

次に地域の歴史的なタカラと結びつけた環境学習の例をあげよう。

赤穂市坂越湾に浮かぶ「生島」は樹林を伐採することなく現代まで至っており、国の天然記念物に指定されている。この樹林を守ってきたのは島にある大遼神社(祭神奈河勝)の存在である。坂越小学校では六年生に



図1 坂越小学校の生島遠泳 (写真提供・坂越小学校 西山由智先生)

なると、「生島」まで坂越湾の海岸から遠泳を行ってきた(図1)。遠泳は明治時代に始まり、競泳が盛んになっ

たところ中断したが、地域の強い希望で二十五年前復活した。爾來この行事を支えているのが地域の先達、水泳少年団の指導者や、坂越漁業組合の人々である。この遠泳は地域と学校を結ぶ大切な働きをしている。またこの遠泳は、歴史、伝統、生態系保護などを結ぶすばらしい環境教育学習となる。

- (1) 子供たちは地域のタカラ「生島」に向かって泳ぐ。美しい生島は苦しい遠泳の到達点であり、目指すべき目標として意識される。
- (2) 大人たちに海の環境が強く意識される。子供たちが泳ぐ海だから美しく保たなければという思いが強くなる。

このような地域のタカラを中心として地域の人的ネットワークを結ぶ環境教育・学習が、さまざまな地域で行われればよいと思う。

● 美しい兵庫(ひょうご)のために — 環境問題は関係性の問題

今年、兵庫県環境政策課が中心となって、県庁六部二十課、県教育委員会が構成される環境教育・学習庁内連絡会議が立ち上がり、調査の結果、十県民局、ひょうご環境創造協会、エメックスセンターなどをあわせる県関係だけで二百を超える関連事



図2 相生市体験型環境学習・ビーチコーミング (8月7日、写真提供・松下剛士氏)

業があることが明らかになった。(図2は、環境省の委託を受けて、相生市・NPO漁協・県立大学環境人間学部などの協働によって進められている体験型海の環境学習(連絡協議会委員長・熊谷哲兵庫県立大学教授)の様子)

かつて兵庫県は一九九六年「兵庫県環境基本計画」で環境学習・教育の推進を定め(第3節)、実に中央環境審議会の答申より半年早く先見的な「エコライフ教育」の推進に向けて」を発表している。その中には

ひょうご環境学習プログラム



ひょうご環境学習プログラム (2003年3月、委員長・谷口文章甲南大学教授) <http://www.pref.hyogo.jp/JPN/apr/hakusho/kankyoprogram/gakusyupromokuji.htm>